http://decfamily.p1.bindsite.jp/2018/

We 35R

No.402　18/07/04

悲しい未来予想図

「東ロボくん」のことについては、以前書いたことがあるのだが覚えているだろうか。日本の国立情報学研究所（大学共同利用機関法人）が中心となって2011年から2016年にかけて行われたプロジェクトで、「ロボットは東大に入れるか」をテーマに、いわゆるAIの可能性と限界を探った試みである。

その中心をになった数学者であり同研究所教授でもある新井紀子先生が、新しい本を出されて話題になった。一節を引用してみよう。

＊

AIがコンピュータ上で実現されるソフトウェアである限り、人間の知的活動のすべてが数式で表現できなければ、AIが人間にとって代わることはありません。今の数学にその力はないのです。コンピュータの速さやアルゴリズムの改善の問題ではなく、大本の数学の限界なのです。だから、AIは神にも征服者にもなりません。シンギュラリティも来ません。

なんだ、じゃ、AIに仕事を取られて失業するっていうのは嘘か。安心した－。もしかして、そう思われましたか。残念なことに、私の未来予想図はそうではありません。シンギュラリティは来ないし、AIが人間の仕事をすべて奪ってしまうような未来は来ませんが、人間の仕事の多くがAIに代替される社会はすぐそこに迫っています。つまり、AIは神や征服者にはならないけれど、人間の強力なライバルになる実力は、十分に培ってきているのです。「東ロボくん」は、東大には合格できませんが、MARCHレベルの有名私大には合格できる偏差値に達しています。

AI楽観論者の人たちは、AIに多くの仕事が代替されても、AIには代替できない新たな労働需要が生まれるはずだから、余剰労働力はそちらに吸収され、生産性が向上し経済は成長すると主張しているようです。チャップリンの「モダン・タイムス」の時代にホワイトカラーが誕生したように、これまでになかった仕事が生まれるのだと言うのです。本当でしょうか。私は悲観しています。（中略）

（チャップリンの時代にも）ベルトコンベアの導入で向上がオートメーション化される一方、事務作業が増えホワイトカラーと呼ばれる新しい労働階級が生まれました。でも、それは一度に起こったことではありません。タイムラグがありました。大学が大衆化し、ホワイトカラーが大量に生まれる前に、多くの工場労働者が仕事を失い、社会に失業者が溢れました。それが20世紀初頭の世界大恐慌の遠因となりました。

その時代、ホワイトカラーという新しい労働需要があったのに、なぜ失業者が溢れたのか。答えは簡単です。工場労働者はホワイトカラーとして働く教育を受けておらず、新たな労働市場に吸収されなかったのです。

AIの登場によって、それと同じことが、今、世界で起ころうとしています。

＊

極論だが、「東ロボくん」＝AI がすでにMARCHのレベルの達しているということは、逆に言えば、MARCHレベルの仕事は今後AIに置き換わってしまうということであり、AIに代替できない仕事とは、MARCHレベルの上を行く仕事だということになる。そして、もちろんAIの「人件費」の方が安いに決まっている。これが悲しい未来予想図である。